

三保地区 カルテ

データについて

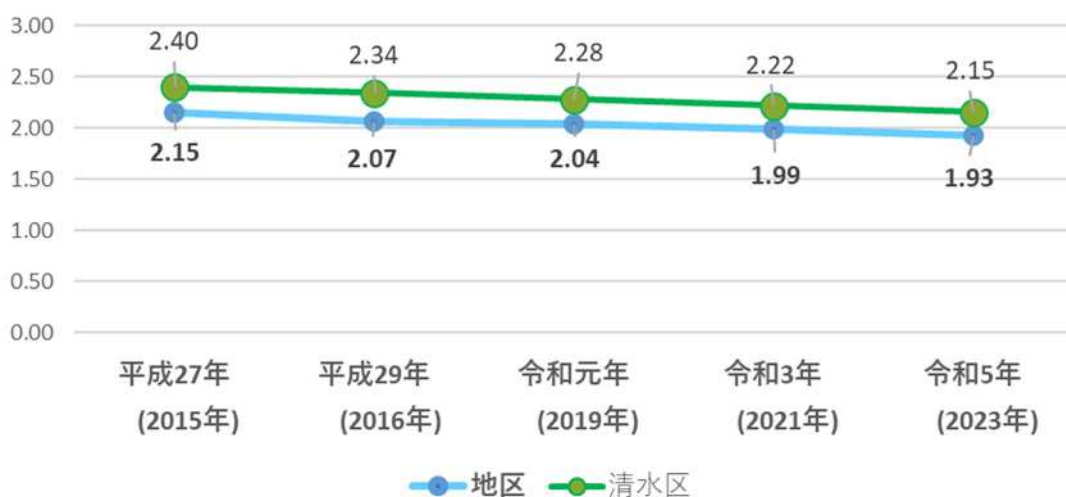
- ・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。
- ・住民基本台帳は各年の3月31日の数値、自治会加入数は各年の4月1日の数値です。
- ・町名は住民基本台帳を採用しているため、自治会名と一部異なる場合があります。

三保地区の人口特性 令和5年3月 8,062人 4,177世帯 1.93人/世帯

●人口・世帯数の推移



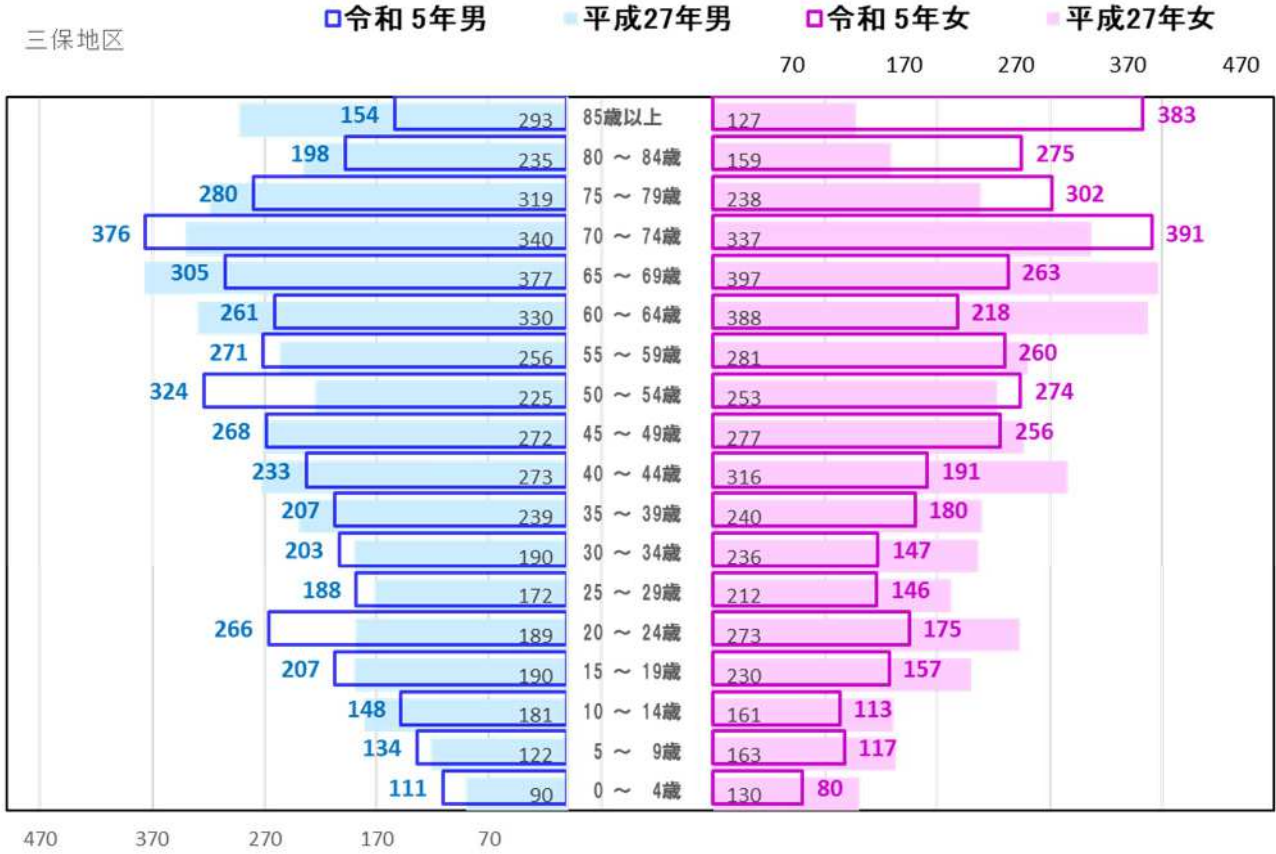
●一世帯当たりの人口推移



●65歳以上の高齢者を支える生産年齢層 (15-64歳)

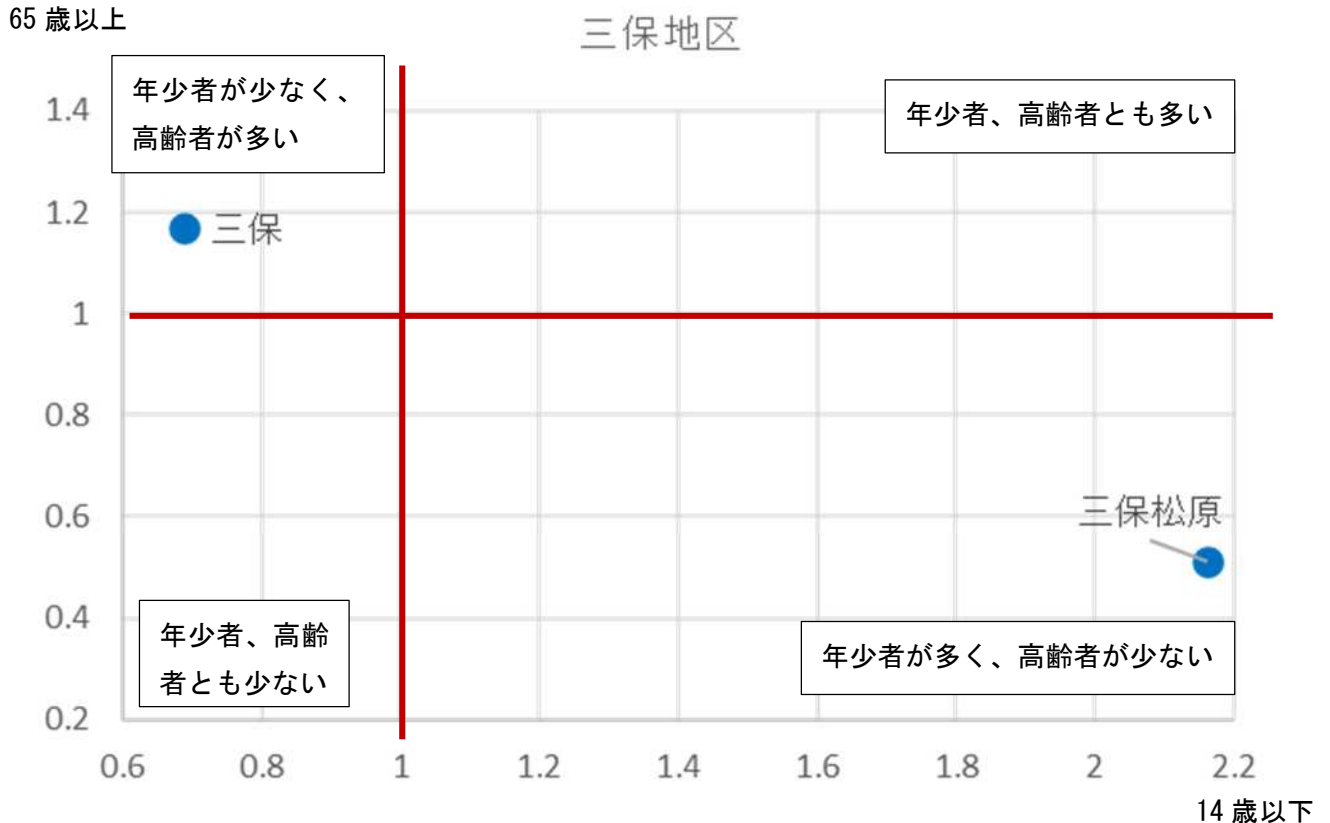
区分	平成27年 (2015年)	令和5年 (2023年)
地区	1.79人	1.51人
静岡市	2.16人	1.88人
清水区	1.98人	1.71人

●人口ピラミッド【平成27年(2015年)と令和5年(2023年)の5歳階級別男女別構成】



●町別の14歳以下と65歳以上の割合分布(清水区の平均値を1とした場合)

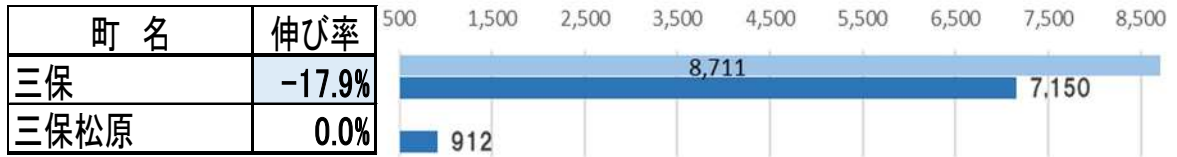
※年少者(14歳以下)高齢者(65歳以上)



●町別の伸び率と人口推移

【平成 27 年（2015 年）と令和 5 年（2023 年）の比較】

人口推移グラフ（上段平成 27 年 下段令和 5 年）

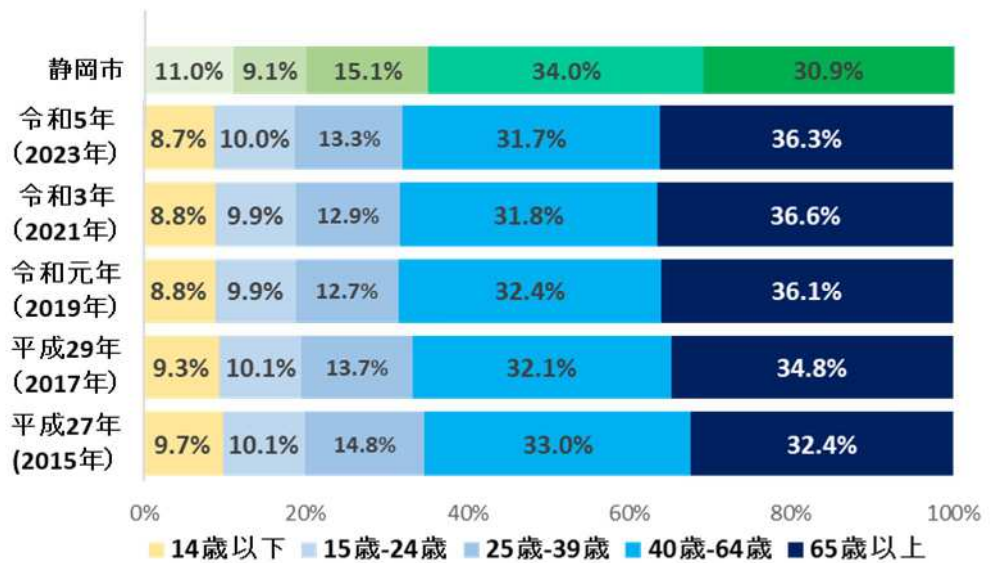


		人 口	
		平成 27 年 (2015 年)	令和 5 年 (2023 年)
三保地区	-7.5%	8,711	8,062
静岡市	-4.6%	713,564	680,913

注) 三保松原は、令和 3 年に町名新設のため、平成 27 年の統計データがありません。

●町別人口区分別割合

・年齢5区分別人口割合の推移



※15-24歳は高校から社会人(大学修士課程含む) 25-39歳は社会人(大学博士課程含む)

・令和5年人口3区分別：

市の割合より

青字 14歳以下の割合が低い場合

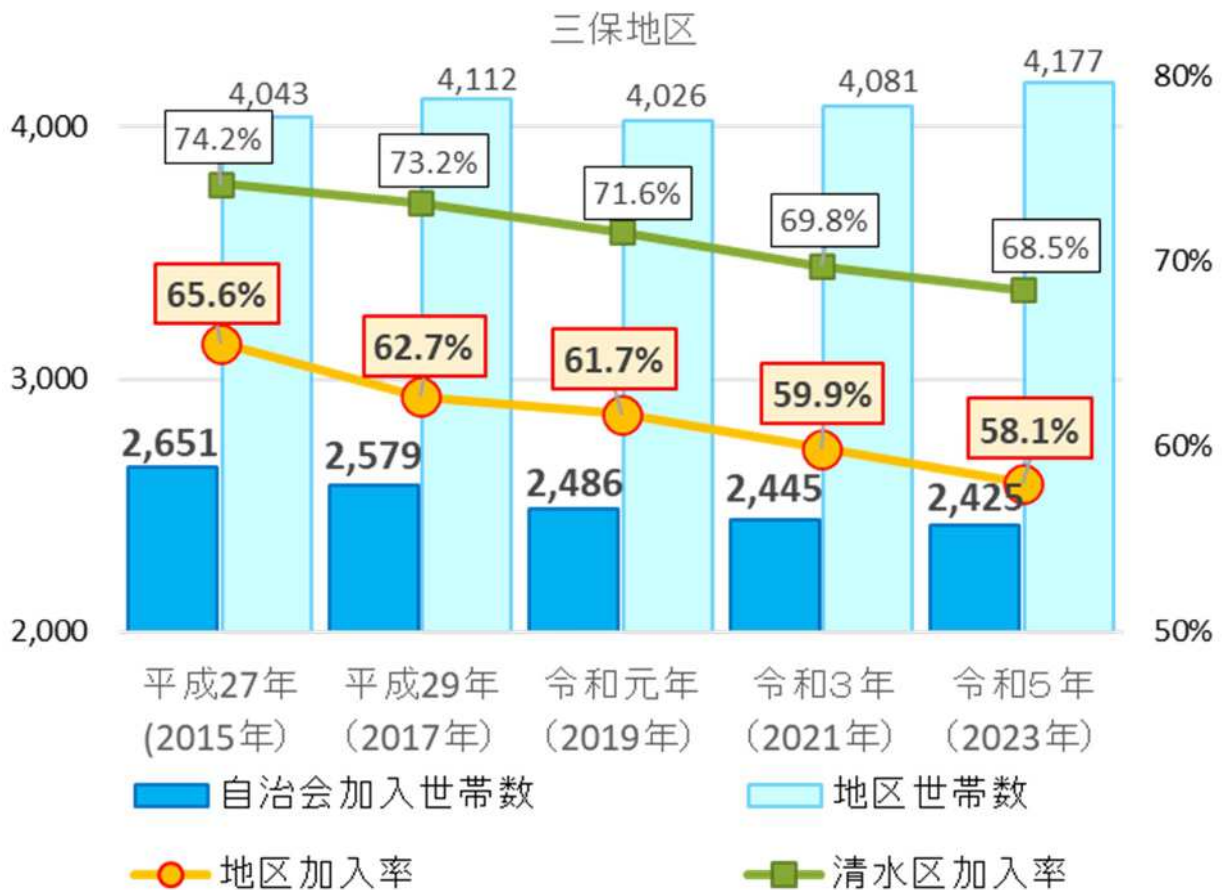
赤字 65歳以上、75歳以上の割合が高い場合

町名	令和5年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
三保	7.0%	38.8%	21.1%
三保松原	22.0%	17.0%	9.0%
三保地区	8.7%	36.3%	19.7%
清水区	10.2%	33.2%	18.7%
静岡市	11.0%	30.9%	17.2%

●自治会加入状況

令和5年

加入率	地区	58.1%	加入世帯数	2,425世帯
	清水区	68.5%	住民基本台帳世帯数	4,177世帯



三保地区コメント

- ・人口は減少傾向、世帯数は増加傾向にあります。世帯人数が減少していることから、単身世帯や小家族化が進んでいるようです。
- ・人口減少傾向の「三保」に、令和3年に「三保松原」が加わりましたが、地区の人口は減少傾向を示しています。一方、世帯数は「三保松原」が加わり増加しています。
- ・15歳から24歳の割合は10%程度で停滞しています。
- ・令和5年の65歳以上を1人支える生産年齢(14歳から65歳)が市の1.9人より少ない1.5人で減少傾向にあり、若い世代が地区や自治会活動等への負担が増えることが見込まれます。
- ・さらに、自治会の加入率は市の値69%より低い58%ですが、年々減少傾向が見られます。40歳から64歳の自治会活動等で中心的に活躍を期待される層の減少も見られます。

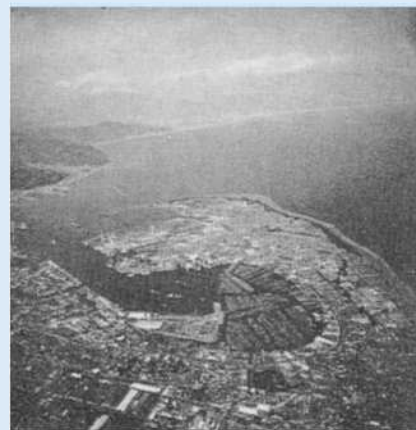
三保地区

地名のゆかり

昔、三保は美穂、御保、三穂などと書かれていましたが、鎌倉時代から、三保の文字が使われているようです。

この「みほ」という地名は、弁天崎、貝島崎、真崎の3つの岬が稲の穂のように内側に折れ曲がっていることから生じたとも、「み」は美称、「ほ」は「秀(ほ)」で、美しい岬を表すともいわれています。また、一説では、「ほ」は「兆」であり、神（三保明神）のいる場所を意味しているとも説明されています。

三保半島は、古くから、海難を避けるため祀られている御穂神社の社領で、神官の太田氏が代々支配してきました。やせた砂地が多いため、農民は根潮を利用してさつまいもを栽培したりしましたが、何回も津波や暴風に襲われています。古文書には、安政の大地震（1854）のとき、真崎が大きく陥没し、大津波が畑を壊したことも記録されています。



空から見た三保半島

羽衣の松

白砂青松で名高い名勝三保の松原に、観世元清の「羽衣」によって有名になった「羽衣の松」があります。毎年、10月に開催される「羽衣まつり」では、浜辺に特設舞台が設けられ、この松を背景に羽衣伝説を題材とした能「羽衣」が上演されます。

衣掛けの松として知られていますが、本来は御穂神社のご神木で、筒粥神事の際、海の彼方より来臨する常世神の目印となる「憑(よ)り代」としての役目をしています。

平成22年10月、樹齢650年（推定）とされている大木の樹勢が衰え、数百年ぶりに世代交代し、新しい松にその役割を託しました。松の横には、享和3年（1803）に駿河町鞆負(ともう)が建立した「羽衣天女詞碑」があります。



羽衣の松

貝島御殿

江戸時代の初めから中期にかけて、三保貝島に「貝島御殿」がありました。

徳川氏が、関ヶ原の戦いがあったまもない慶長15年（1610）ごろ建てたもので、富士を見るための「富士見やぐら」もありましたが、その構造など詳しいことは分かりません。

建てた目的は、徳川氏の遊覧のためだと言われ、頼宣がしばしば休養に訪れています。しかし、本当の目的は、当時、水軍の根拠地で、幕府の材木置場や蔵も置かれていた重要な軍事基地、清水みなどを防衛するためだったようです。

慶長16年の台風で富士見やぐらが大破し、さらに宝永4年（1707）の大地震と津波によって、跡形もなく流されてしまったということです。

なお、御殿があったと思われる辺りに、明治43年、最勝閣という竜宮城を思わせるような高樓が建てられ、昭和のはじめまでありました。



貝島にあった最勝閣

御穂神社と神の道

御穂神社は、航海安全や漁業、農業の神として、古くから人々にあがめられ、現在も「三保の明神さん」として親しまれています。

春の例祭である「筒粥祭り」は、毎年2月14日から15日の未明にかけて行われる粥占いの神事で、常世神を迎える神事も併せて行われています。

常世神は、羽衣の松の際にある「羽車神社」に降臨し、御穂神社に続く松並木「神の道」を通って、御穂神社に導かれるとされており、樹齢200年とも300年とも云われる老松の並木が約500m続いています。

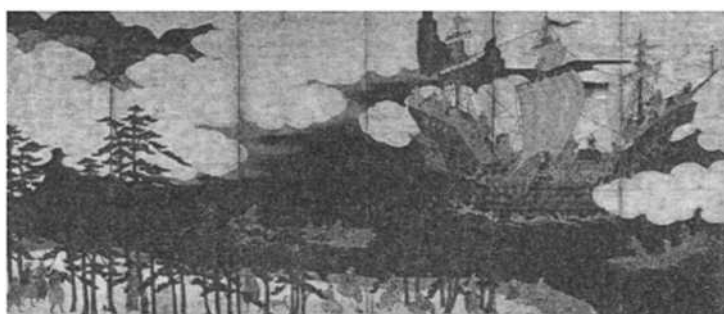


神の道

三保に現れたガレオン船

慶長12年（1607）に家康公は、豊臣秀吉が無益な戦争で朝鮮国に多大な迷惑をかけたお詫びをするために、朝鮮国からの使節を丁重に日本にお迎えしました。これが江戸期の朝鮮通信使の始まりであり、使節一行は清水区興津の清見寺を宿舎として歓迎されました。

この時の朝鮮側の記録が『海槎録』です。それによると「何とも巧妙で美しい船」と絶賛し、朝鮮使節たちも夢中で幕府の仕立てた御座船で見物したといます。これこそ、ポルトガルが世界に誇るガレオン船でした。ガレオン船とは16世紀の日欧通行船で、極めて大型船で重装備を備え数百トンから千トン程度の船でした。



南蛮船駿河湾来航図屏風（九州国立博物館蔵）

「羽衣伝説」

昔々、三保の村に白龍という漁師が住んでいました。

ある日のこと、白龍が浜へ出かけ、浦の景色を眺めていました。

ふと見れば、一本の松の枝に見たこともない美しい衣がかかっています。

しかし、あたりに人影はありません。誰かの忘れ物だろうと、白龍が衣を持ち帰ろうとしたそのとき、どこからともなく天女があらわれて、こう言いました。「それは天人の羽衣、どうぞお返しください」

ところが、それを聞いて白龍はますます大喜び。「これは国の宝にしよう」とますます返す気配を見せません。

すると天女は「それがないと私は天に帰ることができません」と、そう言ってしおしおと泣き始めました。

さすがに白龍も天女を哀れに思い、こう言いました。

「では、天上の舞いを見せてくださるのならば、この衣はお返ししましょう」

天女は喜んで三保の浦の春景色の中、霓(げい)裳(しょう)羽衣(うい)の曲を奏し、返してもらった羽衣を身にまとって、月世界の舞いを披露しました。そして、ひとしきりの舞のあと、天女は空高く、やがて天にのぼっていったといます。

頃は十五夜。それは月明かりが美しい宵のことでした。

